様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １９ 日現在

機関番号：３４３１０
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｈ０１４６３

研究課題名（和文）紛争地域における「記憶」と「安全保障化」のメカニズム－「東地中海地域」を事例に

研究課題名（英文）Mechanism of Relations between Memory of Conflicts and Securitization in the Countries of the East Mediterranean Region

研究代表者
月村　太郎（Tsukimura, Taro）

同志社大学・政策学部・教授

研究者番号：７０１６３７８０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　10,900,000円

研究成果の概要（和文）：紛争の「記憶」の安全保障化において、「記憶」は恣意的に利用され得る。同一の政権ですら同じ紛争の「記憶」における強調点を変え、新旧の紛争の「記憶」を混合して利用する事例がある。政権が脆弱である場合には、「安全保障化」に非国家主体の越境的活動やネットワークが大きく影響する可能性がある。東地中海地域の安全保障に関する認識はEUとEU外のアクター間のみならず、EU諸国間でも齟齬が見られる。更に2022年2月24日のロシアによるウクライナ侵攻は、東地中海地域のみならずユーラシアのパワーバランスや、大国の対外政策に大きな変更を迫っている。この「事件」はやがて「安全保障化」される「記憶」となるであろう。

研究成果の学術的意義や社会的意義
紛争多発地域である東地中海地域における「記憶」の「安全保障化」に関する研究は、同様に紛争が頻発する世界各地における事例についても、その分析に際して、有意な手がかりを与えてくれることになる。さらに、2022年2月24日のロシアによるウクライナ侵攻に続く戦闘はまさに「東地中海地域」において発生したのであり、本研究における知見は、ウクライナ侵攻が終了した後に、その「記憶」が「安全保障化」するプロセスや、将来における発現形態の考察にも重要なヒントを提示することになる。

研究成果の概要（英文）：It is pointed out that memory of conflicts can be utilized without consistency. In some cases, the government often emphasizes different parts in the same conflict, and in the others, it mixes up memories of different conflicts for the aim of securitization. If the government is weak, securitization can be strongly influenced upon by the cross-border activity and network of non-state actors. There is the inconsistency in realization on security in the East Mediterranean region, between the states within EU and the actors outside of EU, and even among the states within EU each other. Besides, the battle between Russia and Ukraine following the invasion on 24th February 2022, can lead to changing balance of power not only in the East Mediterranean region, but also the Eurasia as a whole, and the foreign policy in the big power can be also shifted. Surely, this “Event” can be a securitized memory.

研究分野：国際政治史

キーワード：東地中海地域　紛争　記憶　安全保障化

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景
（１）本研究においては、バルカン地域、旧ソ連黒海周辺地域、北アフリカを含む中東地域を一括して「東地中海地域」として扱っている。「東地中海地域」では歴史的に多くの紛争が発生しており、それをひとつの原因として、この地域における国家の多くの政治的安定性は決して高くない。
（２）「東地中海地域」は、外部の大国に支配されたり、その強い影響力下に置かれてきた。外部の介入は、「東地中海地域」が政治的に不安定である原因である一方、政治的に不安定となっている結果でもある。
（３）「東地中海地域」諸国において、紛争の「記憶」は、安全保障上のイシューを論ずる際に政治的に頻繁に利用されてきた。外部アクターたる大国が「東地中海地域」に介入する場合にも、「記憶」の「安全保障化」はしばしば深く関連してきた。

２．研究の目的
　研究背景を踏まえ、「記憶」がどのように「安全保障化」していったかについて、実態を明らかにすることが、本研究の目的である。「東地中海地域」の実態を考察することで、多発する紛争の「記憶」が安全保障上のイシューとして理解されている他の紛争多発地域の政治的考察に資することになろう。

３．研究の方法
（１）本研究の研究体制においては、「東地中海地域」を構成するバルカン地域、旧ソ連黒海周辺地域、北アフリカを含む中東地域に関して、それぞれの地域を専門として地域研究者を配し、他方で介入する外部アクターを研究対象としてきた研究者も含めた。
（２）具体的な研究方法としては、少なくとも各年度１ 回の意見交換・打ち合わせの機会を設け、また研究代表者が主宰する地域紛争研究会の例会と合同することで、外部研究者との意見交換も積極的に図ってきた。
（３）本研究目的の性格上、現地調査が中心的な研究活動のひとつであった。しかしながら、COVID-19 のパンデミックにより、2020 年、2021 年には現地調査が殆どできず、2021 年度の予算の一部を繰り越すことで対応した。

４．研究成果
（１）提出された内容をもとに研究分担者別に研究成果を記載する。尚、本研究開始当初に予想されなかった事態として、2022 年 2 月 24 日のロシアによるウクライナ侵攻から始まる戦闘がある。まさに「東地中海地域」において発生した紛争であり、これにより安全保障をめぐる議論が一変する一方で、周知のように、かつての「記憶」が頻繁に持ち出されている。研究成果にも、こうした事態が影響していることは言うまでもない。
（２）バルカン地域、特に旧ユーゴ諸国間においては、以下の 2 点が明らかになった。第一に、独立をめぐる内戦からまだ時間が余り経過していないために、有力政治家が意図的に行った言動だけでなく、かつての紛争において敵側を代表する人物が相手国を訪問するだけでも、訪問された側における紛争の「記憶」が蘇り、特に訪問された側に民衆的な被害者意識が強い場合には、その傾向が強いことである。前者の例としては、クロアチアの歴代大統領などがボスニアにおいて行った発言や、アルバニア大統領によってセルビアに対してコソヴォに関してなされた主張などがある。後者を代表する好例は、セルビアのヴチッチがスレブレニツァを訪問した際に生じた混乱である。第二に、紛争の「記憶」が安全保障上のイシューとして利用される場合には、紛争が繰り返されたケースでは、新旧の「記憶」が錯綜して引用される点である。（月村太郎）
（３）まず東地中海問題の外部アクターとしての欧州に関して、欧州内部の相互作用および欧州が東地中海問題に与える影響について考察した。とりわけ東地中海問題をめぐる EU 内（欧州委員会や欧州議会の主導的人物や、英、仏、ポーランド、ハンガリー）および EU 外（主にトルコ、ウクライナ、ジョージア）の認識の齟齬と収斂について集中的に分析を行った。その後に、ロシアによるウクライナ侵攻に焦点を当て直し、この侵攻をめぐる欧州の対応はどのようなものだったのか、またこの侵攻が東地中海問題にどのような影響を及ぼしているのかについて分析を行った。（東野篤子）
（４）当初は、コロナ禍により海外調査ができなかったものの（2019 年度には、年度末に海外出張を予定していたが、中止せざるを得なかった）、オンラインでのインタビューや会合が世界

的に普通に行われるようになったため、そのようなオンラインツールを駆使しての研究となった。2019 年前半は本研究を遂行するための下地づくりを行っていたが、2020 年に入るとコロナ禍が深刻となり、コロナが及ぼす国際関係の変化を中心に研究を行なった。特に、ロシアが展開したマスク外交、ワクチン外交の成果に注目した。しかし 2020 年９月にはアゼルバイジャンとアルメニアの間でナゴルノ・カラバフ戦争が再燃し、それによってアゼルバイジャンとトルコの地域での影響力が顕著に高まる一方、ロシアの影響力についてはプラスマイナスが出るという状況となった。さらに 2021 年８月には米軍がアフガニスタンから撤退し、力の真空が生まれ、相対的に中国の影響力が強まる一方、グローバルサウスの影響力も高まるなど、ナゴルノ・カラバフ戦争に次いで、ユーラシアのパワーバランスに大きな変化が生まれた。その後、ウクライナ戦争がもたらす国際関係への影響に注目した。ここでロシアの地域的な影響力は完全に衰え、ロシアが影響力を持ち続けられたのは、影響圏ではベラルーシのみ、世界ではアフリカ、中東、南米などの反欧米・親露国に限られるようになってしまった。他方、トルコが存在感を示すなど、ユーラシアのパワーバランスの変化が起き続けていった。（廣瀬陽子）

（５）ドイツ外交における記憶をめぐる問題に関連して、ドイツと歴史的に因縁の深いポーランドとの関係に関して歴史的な観点から考察した論文や、戦後ドイツとヨーロッパに関する研究を基にした共著書をまず発表した。またドイツの紛争への対外関与について検討する上で重要な影響を与えるアメリカとの関係に関連して、独米関係に関する単著を刊行した。加えて、ドイツを含む西側諸国のロシアに対する政策に関する報告へのコメンテーターを務め、さらに 2022 年 2 月のロシアのウクライナ侵攻を受けて、戦後ドイツの対ロシア政策に関して冷戦期の時代背景を踏まえた報告を行った。このロシアのウクライナ侵攻をめぐるドイツ外交に関連して、人権問題をめぐる政府の姿勢に関する論文や、ドイツ政府の対応を分析する上で重要な東方政策に関して歴史的に考察する論考を発表した。（妹尾哲志）

（６）トルコのエルドアン政権が未承認国家「北キプロス・トルコ共和国」へのアプローチを、キプロス再統合支持から不支持へと変化させた過程において、キプロス分断の原因となったキプロス紛争の記憶がどのように利用されてきたのかを、トルコと北キプロスの報道や議会資料をもとに分析した。その結果、同一政権においてもアプローチによって利用する記憶や強調される部分が変化することが明らかとなった。また、エルドアン政権の北キプロスへのアプローチがトルコ・ナショナリズム的傾向を強めるなかで、キプロス紛争だけでなく、共和国建国期のトルコ・ギリシャ間の住民交換の記憶も利用されていることが明らかとなった。住民交換は宗教に基づいて実施されており、これは同政権のナショナリズムにおいても強調される点である。また、第一次世界大戦期のナショナリズムの在り方を同政権が描く際も、宗教的側面がしばしば強調されることが明らかとなった。（岩坂将充）

（７）中東において最も不安定なサブリージョンである「歴史的シリア」における安全保障は、国家よりも非国家主体の越境的活動やネットワークによって大きく左右されていることがあらためて明らかになり、また、それを性格に捉えていく上で批判的地政学の諸概念が一定の有効性を持つことが確認された。こうしたことを踏まえ、「歴史的シリア」の安全保障の特性について、国家や非国家主体による政策や戦略を解明すると同時に、それらを非エリートの市民たちがどのように捉えていうるのか、その実態について世論調査データを用いることで析出を試みた。そこで浮き彫りにされたのは、市民たちが民族や宗教といった人間属性を先行研究で指摘されてきたほどは重視しておらず、国際情勢の変化を合理的かつ冷静に見極めようとする姿勢であった。このことは、オリエンタリズム批判以来問題視されてきた文化本質主義的説明をあらためて批判するための契機となった。（末近浩太）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計12件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 廣瀬陽子	４．巻 92
２．論文標題 南コーカサスにおける非民主的な「安定」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 アステイオン	６．最初と最後の頁 58-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 廣瀬陽子	４．巻 120／1･2
２．論文標題 Covid-19へのロシアの対応：内政での締め付けと外交的利用	５．発行年 2021年
３．雑誌名 国際法外交雑誌	６．最初と最後の頁 363-375
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 妹尾哲志	４．巻 199
２．論文標題 書評：清水聡著『東ドイツと「冷戦の起源」1949～1955年』（法律文化社、2015年）、全247頁	５．発行年 2020年
３．雑誌名 国際政治	６．最初と最後の頁 199-202
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 東野篤子	４．巻 204
２．論文標題 『国際政治』におけるヨーロッパ研究の傾向	５．発行年 2021年
３．雑誌名 国際政治	６．最初と最後の頁 126-135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 末近浩太	4．巻 37／II
2．論文標題 レバノン・ヒズブッラーの「二正面抵抗」のフレーミング：ハサン・ナスルッラー書記長演説の計量テキスト分析	5．発行年 2022年
3．雑誌名 日本中東学会年報	6．最初と最後の頁 31-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 末近浩太	4．巻 15
2．論文標題 中東政治研究におけるイスラーム主義の諸相：「方法論的セキュラリズム」を超えて	5．発行年 2022年
3．雑誌名 イスラーム世界研究	6．最初と最後の頁 205-221
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 岩坂将充	4．巻 48／1
2．論文標題 トルコ・北キプロス関係の変化と東地中海地域の安全保障	5．発行年 2020年
3．雑誌名 国際安全保障	6．最初と最後の頁 43-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 末近浩太	4．巻 23
2．論文標題 はじめに	5．発行年 2021年
3．雑誌名 日本比較政治学会年報	6．最初と最後の頁 i-x
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 廣瀬陽子	4．巻 25（4）
2．論文標題 ロシアによるハイブリッド攻撃の脅威	5．発行年 2019年
3．雑誌名 治安フォーラム	6．最初と最後の頁 34-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 末近浩太	4．巻 18（9）
2．論文標題 レバノン－政治改革への一進一退	5．発行年 2020年
3．雑誌名 中東動向分析	6．最初と最後の頁 27-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 東野篤子	4．巻 47（1）
2．論文標題 ヨーロッパと一帯一路－脅威認識・落胆・期待の共存	5．発行年 2019年
3．雑誌名 国際安全保障	6．最初と最後の頁 32-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 妹尾哲志	4．巻 196
2．論文標題 在欧米軍削減問題と西ドイツ外交	5．発行年 2019年
3．雑誌名 国際政治	6．最初と最後の頁 33-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 妹尾哲志
２．発表標題 討論：イギリスの戦後ヨーロッパ秩序構想
３．学会等名 日本国際政治学会2021年度研究大会「欧州国際政治史・欧州研究分科会」オンライン
４．発表年 2021年

１．発表者名 Atsuko Higashino
２．発表標題 The BRI in Europe - a View from Japan
３．学会等名 China Risk and China Opportunity for a Free and Open Indo-Pacific CHOICE - Japan Dialogue (online)
４．発表年 2021年

１．発表者名 Atsuko Higashino
２．発表標題 Lublin Triangle: How to Build Effective Relations with Asia and Japan? A Japanese Perspective
３．学会等名 2nd International Forum: UKRAINE AND JAPAN IN REGIONAL AND GLOBAL CONTEXT (online)
４．発表年 2022年

１．発表者名 Kota Suechika
２．発表標題 Critical Geopolitics of the Syrian Conflict: The Territorial Partitions of Bilad al-Sham and Beyond
３．学会等名 Panel 6B “Critical Perspectives on Eastern Mediterranean Security,” The 23rd Mediterranean Studies Association Annual International Congress, University of Gibraltar, GIBRALTAR (online)
４．発表年 2021年

１．発表者名 Kota Suechika
２．発表標題 Israeli Zionists or Syrian Takfiris: A Quantitative Analysis of Hezbollah’s Framing of Resistance
３．学会等名 Panel RC42.04 “Evolving Methodologies in the Study of Middle East Politics,” The IPSA 26th World Congress of Political Science, “New Nationalisms in an Open World,” Lisbon, PORTUGAL (online)
４．発表年 2021年

１．発表者名 Kota Suechika
２．発表標題 Hezbollah’s Framing of the Two-front Resistance: A Quantitative Analysis of Hasan Nasrallah’s Speeches
３．学会等名 P6596 “Armed Non-State Actors and their Quest for Legitimacy,” Middle East Studies Association (MESA), The 55th Annual Meeting (online)
４．発表年 2021年

１．発表者名 Masamichi Iwasaka
２．発表標題 Security, Nationalism and Islam in Turkish-Northern Cypriot Relations: An Analysis of the Interaction of ‘Domestic’ Politics
３．学会等名 The 23rd Mediterranean Studies Association Annual International Congress, University of Gibraltar, Gibraltar (online)
４．発表年 2021年

１．発表者名 Yoko Hirose
２．発表標題 Russian Hybrid Warfare: Focusing on Its Change in Characteristics and Effects for the Former USSR
３．学会等名 19th Aleksanteri Conference "Technology, Culture, and Society in the Eurasian Space（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kota Suechika
２．発表標題 Reconsidering the State-Convergence Thesis in Syria under Conflict: A Poll Survey Data Analysis
３．学会等名 ISA International Conference 2019（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 末近浩太
２．発表標題 中東政治研究におけるイスラーム主義－逸脱事例・パラドクス・選択バイアス
３．学会等名 日本国際政治学会2019年度研究大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 岩坂将充
２．発表標題 権力分立から権力集中へ－トルコにおける改憲過程
３．学会等名 日本比較政治学会第22回研究大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計10件

１．著者名 坂井一成、八十田博人、月村太郎、東野篤子、今井宏平、池本大輔、遠藤乾、小森弘美、鈴木一人、正躰朝香、鶴岡路人、中田瑞穂、福田耕治、村田奈々子、森井裕一、吉井昌彦、吉沢晃、渡邊啓貴、上原良子、荻野晃ほか	４．発行年 2020年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 240
３．書名 よくわかるＥＵ政治	

１．著者名 廣瀬陽子	４．発行年 2021年
２．出版社 講談社	５．総ページ数 352
３．書名 ハイブリッド戦争　ロシアの新しい国家戦略	

１．著者名 今井宏平、廣瀬陽子、吉岡明子、青山弘之、阿部利洋、岡野英之、辻田俊哉	４．発行年 2022年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 164
３．書名 クルド問題 非国家主体の可能性と限界	

１．著者名 妹尾哲志	４．発行年 2022年
２．出版社 晃洋書房	５．総ページ数 248
３．書名 冷戦変容期の独米関係と西ドイツ外交	

１．著者名 森聡、福田円、妹尾哲志、溝口修平、小野澤透、中島琢磨	４．発行年 2022年
２．出版社 慶應義塾大学出版会	５．総ページ数 320
３．書名 入門講義　戦後国際政治史	

1．著者名 今井宏平、末近浩太、錦田愛子、浜中新吾、松尾昌樹、山尾大、横田貴之	4．発行年 2022年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 264
3．書名 教養としての中東政治	

1．著者名 足立研幾・板木雅彦・白戸圭一・鳥山純子・南野泰義・末近浩太・南川文里・中本真生子・西村智朗・嶋田晴行・川村仁子・大山真司・ 林大祐・本名純・星野郁	4．発行年 2021年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 312
3．書名 プライマリー国際関係学	

1．著者名 北岡 伸一、細谷 雄一、廣瀬陽子、田所昌幸、篠田英朗、熊谷奈緒子、詫摩佳代、遠藤貢、池内恵	4．発行年 2020年
2．出版社 東洋経済新報社	5．総ページ数 424
3．書名 新しい地政学	

1．著者名 広瀬佳一、東野篤子、篠崎正郎、小川健一、小林正英、湯浅剛、、小森宏美、中村健史、今井宏平、小泉悠	4．発行年 2019年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 268
3．書名 現代ヨーロッパの安全保障	

１．著者名 菅 英輝、妹尾哲志、南基正、三牧聖子、鄭敬娥、青山瑠妙、徐顕芬、藤本博、アニカ・A・カルバー、リリー・G・フェルドマン	４．発行年 2020年
２．出版社 晃洋書房	５．総ページ数 336
３．書名 競合する歴史認識と歴史和解	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	廣瀬　陽子 (Hirose Yoko) (30348841)	慶應義塾大学・総合政策学部（藤沢）・教授 (32612)	
研究分担者	妹尾　哲志 (Senoo Tetsuji) (50580776)	専修大学・法学部・教授 (32634)	
研究分担者	東野　篤子 (Higashino Atsuko) (60405488)	筑波大学・人文社会系・准教授 (12102)	
研究分担者	末近　浩太 (Suechika Kota) (70434701)	立命館大学・国際関係学部・教授 (34315)	
研究分担者	岩坂　将充 (Iwasaka Masamichi) (80725341)	北海学園大学・法学部・准教授 (30107)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関